

黒沢清監督作品「トウキョウソナタ」の魅力 —ハイブリダイゼーション(交雑)とモデュレーション(転調)—

クレリア・ゼルニック
(パリ国立高等美術学校教授)

黒沢清監督は映画『トウキョウソナタ』において、見たところ普通の、しかし、秘かにひび割れた、日本人一家族の肖像画を描き出している。そこでは映画の諸ジャンルが一から他へと、柔らかく滑るように辿られ、交雑(ハイブリダイゼーション)とモデュレーション(転調)が作品を作り上げている。この映画は日本映画に固有のしなやかな可延性を表すとともに、より広く、ドゥルーズがベルクソン再読とも言うべき『シネマ』において示した映画そのものの生命力をも、見事に描き出しているのである。すなわち、ドゥルーズによれば、映画という媒体は、見せかけの運動を作り出す技術であるだけでなく、真の運動、純粹に質的で情動的な運動、いわば音楽的運動、を産み出す芸術なのである。

9月25日(木)18:30～20:30

法政大学市ヶ谷キャンパス58年館2階国際日本学研究所セミナー室

司会: 安孫子 信 (法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授)

通訳: 岡村 民夫 (法政大学国際文化学部国際文化学科 教授)

申込専用フォームからお申込みください

<https://www.event-u.jp/fm/10393.html>

